

初等英語教育における部分的 CLIL を取り入れた授業実践

—家庭科・社会科，2つの統合実践の分析—

M17EP004

太田 圭

1. 研究の目的

継続研究であるが，授業実践が中心であった昨年度に対し，今年度は2本の実践の分析が中心となる．1本目の実践は，英語と社会科の統合実践である．単元構成から教材開発まで通して行ったことで CLIL 型の授業に取り組むことの難しさとともに，その教育的効果も検証することができた．こちらの実践の詳細については平成29年度教育実践報告書(2018)にまとめてある．なお，本稿では切り口を変えて単元構成の視点・教材作成の視点から検証していく．2本目の実践は英語と家庭科の統合実践である．こちらはコミュニケーションを取る必然性と教科を統合するに足る必然性の2つを追求した実践となっている．英語教育を語る際に必ず出てくるキーワードである必然性を，如何に授業の中で具現化するかを検証したものである．具体的な内容については次項以降に詳述する．性格が異なる2つの教科を統合した実践を行ったことで，多くの情報及び示唆を得ることができたのが一年目の成果である．本稿では実践の内容を分析することを通して，小学校現場において CLIL 型の授業を広く一般化していくための視点及び手法を明らかにすることを目指していく．

2. 理論的枠組み

(1) CLIL (内容言語統合型学習) とは

CLIL (Content and Language Integrated Learning) は，もともとヨーロッパの EFL 環境下で始まり，1990 年代に発展してきた教授法である (池田，2011)．他教科の内容を英語の学習の中に取り込むことで，幅広い領域の

語彙を扱いながら自然な形で場面設定を行うことを可能とする考え方である．また，Coyle, Hood and Marsh(2010,p1)の定義では，CLIL では内容のみ，あるいは言語のみが強調されるわけではなく，比重のかけ方は時として変わることがあり，双方が混ざり合った形で教え学ばれるとされている．

CLILには4つのCと呼ばれる原理があり，①内容(Content)，②言語(Communication)，③思考活動(Cognition)，④文化・国際理解/協同学習(Culture/Community)の4つの軸で構成されている (図1参照)．それぞれの軸は既に英語教育の中で主張されているものだが，これらの要素を融合し，教科と語学ともに深めていく部分が CLIL の特徴である．つまり，実践の内容を4Cに分類・整理することが CLIL 型実践において重要なのである．

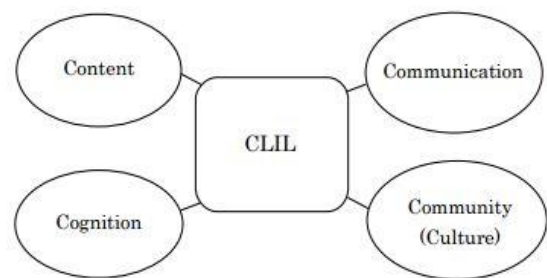


図1 CLIL の4C(池田, 2011)

(2) 学習指導要領上の根拠

本研究は公立の小学校で行うことを前提として行われているため，学習指導要領(2017)に示された内容から法的な根拠を得る必要がある．

まず学習指導要領の中で CLIL 型の授業を志向する上で根拠となるのが，3. 指導計画の作成と内容の取扱い(1) - アに示されてい

る「単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、具体的な課題等を設定し、児童が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、コミュニケーションの目的や場面、状況などを意識して活動を行い～（省略）～学習の充実を図ること。」の部分である。ここからコミュニケーションを行う場面設定の必要性、及び具体的な課題（テーマ・トピック）から単元を構成していくことの重要性が読み取れる。次に、同項の（１）-オには「言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとし、国語や音楽科、図画工作科など、他の教科等で児童が学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること。」と示されている。ここでは他教科の要素や学校行事を活用・関連することで言語活動を充実させていく視点について述べられている。これらが CLIL 型の授業を公立小学校において実施する際の根拠となると考えられる。

（３）本研究における CLIL の定義

CLIL 自体は非常に広範な枠組みであると捉えることができ、様々な要素を内包していることから、筆者なりの定義付けを行うこととした。ここが研究の軸にあたる部分であり、実践の際にこの軸がぶれることがないようにするために必要であると考えた。

笹島(2011)は目的・頻度/回数・比重・使用言語の４つの視点から CLIL のバリエーション进行分类している（図２ 参照）。筆者が目指しているのは科目教育ではなく、英語教育の一部であるため Soft CLIL ということになる。また、公立の小学校での実践であることを踏まえると、頻度/回数・比重の点でも、単元を通してではなく単元の中で小数回実践すること。そして無理なく実施できるものを目指す

という意味では、あくまで授業の一部であることが現実的であると考えた。その意味で Light CLIL であり Partial CLIL である。なお、使用言語は小学校での実践であることを踏まえ、日本語と英語を半々で用いることを想定した(Bilingual CLIL)。

笹島(2011)の分類で見ると、すべての項目において左側に寄っている形になる。つまり、CLIL 実践としては最も比重の軽いものということである。特に小学校の場合、英語を使って新しく教科内容を学ぶというよりも、英語の時間の中で他教科の内容にも触れるという形が想定される。故に、教育現場の実態に合う形で上記の条件を満たした形式を、CLIL を広義に捉えて部分的 CLIL と定義し、以降用いていくこととする。

Soft CLIL	目的	Hard CLIL
英語教育		科目教育
Light CLIL	頻度・回数	Heavy CLIL
単発的・小数回		定期的・多数回
Partial CLIL	比重	Total CLIL
授業の一部		授業の全部
Bilingual CLIL	使用言語	Monolingual CLIL
日本語・英語		英語

図 2 CLIL のバリエーション(笹島, 2011)

３．授業実践の概要

この項では英語科・社会科の統合実践と英語科・家庭科の統合実践の概要について述べていく。両実践とも部分的 CLIL という点では共通しているが、授業構想の点では性質がかなり違っている。

（１）英語科・社会科統合実践

①単元構成

本実践は実習校の５年生年間指導計画『都道府県で遊ぼう』を中心に、より山梨県の有名な内容にフォーカスして再構成した独自単元である。単元名は「英語で山梨を紹介しよ

う」であり，“be famous for～”の表現を使いながら、山梨県の特産品や名所を尋ね合い、紹介し合う活動を行った。

山野(2013)は、CLIL における内容は学習者の言語習得のためのインプットの質と量の確保に必要不可欠であるとしている。また、和泉(2012)も学ぶに値するだけの価値があり、学習者にとって何らかの関連性が見出せるものでなくてはならない、と述べている。本来の年間指導計画上の内容では、47 都道府県の有名なものを紹介し合うという内容であった。既に単元自体が CLIL 的な要素を含むものであったが、子ども達にとってそれらを紹介し合う必然性が弱かった。そこで、より生活に根ざした教材（自身の居住する山梨県）を扱うことで、相手に伝える必然性を持たせることを考えた。また、山梨県を扱うことにはもう一つ別の狙いもある。それは既習事項を活かしてより発展的な内容を扱えることである。具体的には、一般的に小学校 3 年次の社会科では地域の学習を、そして 4 年次では県全体の内容を学習している。つまり、子ども達の中にはある程度山梨県のことについて共通した知識の下地があった。だからこそ全 5 時間で組んだ単元で、中心表現である“be famous for～”を用いつつ、約 30 語の新出単語を扱うことができたと考える。この既習事項を活かすことによって内容を深め、発展的なコミュニケーションを仕組んだのが社会科との統合実践である。

②使用教材

社会科との統合実践で用いた中心教材が、山梨県立大学の高野美千代教授の研究グループが作成した Yamanashi English Card(図 3 参照)である。A から Z までの全 26 文字に一つずつ山梨県の有名なものが紹介されている。およそ半数ほどは子ども達も知っている内容であり、学級の中で知っている子もいれば初めて知る子もいるというバランスが、子ども達の好奇心を高めるのに有効であった。

次に、山梨県版社会科副読本「ふるさと山梨・小学校版 - 郷土を愛し、未来を拓く -」(山梨県教育委員会, 2017)と「山梨県のひみつ」(学研, 2017)である。前者は主に中学年の社会科の授業で教科書とともに授業で用いられる教材である。県内の公立小学校には必ず配布されている。子ども達にとっては、これまでに慣れ親しんできた教材である。構成も非常によくできており、フルカラーで写真も豊富に使われているため、視覚的に子どもの興味を引き出すことができる。加えて、近年の改訂で小学生向けの英語ページが充実したため、本実践に限らず広く社会科との統合実践に活用できる教材となっている。筆者は扱う語彙の選定や、白地図の作成に活用させていただいた。続いて後者は、学研のまんがでよくわかるシリーズの一つである。小学校の図書室には必ずと言ってよいほどに置かれており、子ども達にとっても馴染みのあるシリーズである。この山梨県版が完成し、全県の小学校に配布されたものを使用した。また、このシリーズには英語版が存在し、日本語版と併せて教材作成時に参考にさせていただいた。

③ 4 C の分類

CLIL 実践の特徴である 4 C に活動内容を分類したものが以下の表 1 である。この分類作業を通すことで、実践の意図が明確化することができる。

表 1 社会科実践 4 C 分類表

Content
社会科 山梨県の有名なものを英語で紹介したり尋ねたりする活動を通して、ふるさと山梨について理解を深める。
Communication
学習の言語 Yamanashi English Card にて扱われている山梨県の特産品や名所などの表現に慣れ親しむ。 Akeno Sunflowers, Kofu Basin, Crystals, Devil's Tongue, Ear Shell, Fujizakura, Giblets, Hoto, Inden, Jewelry, Kaiki, Linear Motor Car, Minobusan Kuanji, Nobel Prize Winner, Otsuka Ninjin, Dried Persimmons, Unique Grapes, Rihoku Rice, Shosenkyo, Takeda Shingen, Yoshida no Udon, Ventforet Kofu, Nishijima-washi, Excellent Wine, Yawata-imo, KofuZoo, city, town, village 学習のための言語 be famous for~, be famous for~, especially in~, What is Yamanashi famous for? It is~, It is in~, Great, Close, など
Cognition
学習の言語の暗記・理解と学習のための言語の活用を通して、自分たちのふるさとである山梨についてより深く学び、紹介したり尋ねたりする際に学習言語を運用する。
Community/Culture
学習の言語を使用して山梨県の有名なものの 3 ヒントクイズを作り、友達同士で学び合う。 ALT の母国の有名なものについて知る。

(2) 英語科・家庭科統合実践

①単元構成

社会科との統合実践が単元構成から教材作成まで通して実践したものであるのに対し、家庭科との統合実践はそれぞれの教科として並行して学習している中で部分的に統合を図った点で異なっている。具体的には英語科としては *Hi, friends 1* の *Lesson 1* から *Lesson 5* まで学習しており、家庭科としては「はじめてみようクッキング」(全7時間)に入っただけという子ども達である。調理の基礎を学習しながら単元末に調理実習でゆで野菜サラダを作る内容となっており、この調理実習2時間と事前学習2時間の合計4時間について部分的 CLIL を用いて実践したものである。なお、英語科としての学習内容は *Hi, friends 1 Lesson 6: What do you want?* であり、家庭科としては調理の基礎を学習することが中心となっている。

本実践において、単元を構成する上で以下の3点を重視した。

- i) 教科書(家庭科)や教科書準拠のワークブックを教材のベースとし、それらをもとにした指導計画や教材を作成すること。
- ii) 教育課程上に示された授業時数内で両教科の学びを完結させること。
- iii) コミュニケーションを取る必然性を保証すること。

まず i) については、部分的 CLIL 型の実践が特別に用意されたものではなく、日々の教育実践の中に根ざしたものにできるのか検証するためには、あくまでも現場の中にあるものから授業を構成することが重要であると考えたためである。教科書は開隆堂『わたしたちの家庭科 5・6』を、そして学習ノートは日本標準の『家庭科学習ノート』を使用した。一般的に広く使用されている教材をアレンジすることで、授業者には教材作成の負担を減

らす効果があり、子ども達にとっては見慣れた形式の教材であるため、英語が入ることの心理的な負担を減らす効果がある。また、社会科の統合実践と時と同様、ワークシートの中に英語と日本語を並列表記した。毎時間使用するものであるからこそ、慣れ親しむ中での気づきを促す必要性を感じたためである。

次に ii) の教育課程上に示された時数についてである。筆者としては、研究のために特別な授業を構想し、持ち出し時間で実践することは部分的 CLIL の効果を検証する上で適切ではないと考えた。多忙化が叫ばれて久しい今、日々の教育活動の中で無理なく実践できることが指導法として大切であると考えたためである。故に本実践においても時数内で収まる構成とすることに留意した。ここで CLIL の 4C に分類した表2が役立った。つまり、何を目指し、何を教えるのかという目的を整理したことで、一時間ごとに必要な指導内容や目標、評価について明確化することができたのだ。

表2 家庭科実践 4C 分類表

Content	Communication	Cognition	Community/Culture
家庭科 「調理実習(ゆで野菜サラダ)」を英語を用いながら行う。	【学習の言語】 食材名 (cabbage, broccoli, carrot) 調味料 (salt, vinegar, salad oil, pepper) 序数 (first, second, third, fourth, fifth) 作業 (boil, wash, cut) 感情(delicious, good, Yummy) What do you want? ~please. を使った英語表現に慣れ親しむ。 【学習のための言語】 What is this? It is ~など	ゆで野菜サラダ調理の際に必要な学習言語の暗記・理解。 学習言語を使用する調理・言語の運用。	学習言語を使いながら、班ごとに協力してゆで野菜サラダを作成する。 調理が終わり次第、班ごとに試食を行い、英語でコミュニケーションを行い感想を共有する。 ALT と交流し合い、食文化の違いについて知る。

最後に iii) の必然性についてである。まずコミュニケーションを取る必然性は、外国語教育の中では常に言われてきたことである反面、授業内で保証することの難しさを筆者としては感じてきた。そこで、部分的 CLIL を

用いて ALT と一緒に野菜サラダを作るという目的意識とともに、活動を成立させるためには作業工程や自分の意思を伝える必要があるという相手意識を保証することで、コミュニケーションを行う必然性を担保できると考えた。調理実習の様に、体験的な活動であるからこそ、ALT という要素を入れることで必然性を生みやすい。これは、他の教科において部分的 CLIL の実践を考える際にも生かせる視点である。

4. アンケート結果の分析

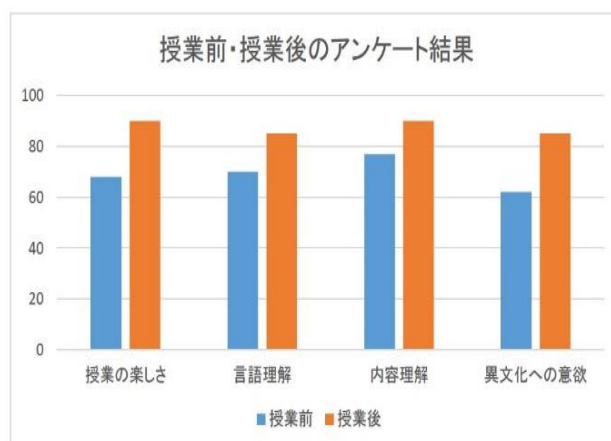
両実践とも、実践授業の前後で児童の英語科に対する捉えがどの様に変容するのか検証するためにアンケート調査を行った。各調査項目については山野(2013)を参考にし、1～4の選択式と自由記述式を併せて実施した。回答選択式項目は以下の7項目である。

- Q1. 英語の授業は楽しいか。(楽しさ)
- Q2. 英語がわかるか。(言語理解)
- Q3. 内容はわかるか。(内容理解)
- Q4. 授業は難しいか。(難易度)
- Q5. やりがいはあるか。(達成感)
- Q6. (異)文化のことをもっと知りたいか。
(異文化理解への意欲)
- Q7. 英語で世界の人とコミュニケーションしてみたいか。
(コミュニケーションへの意欲)

1～4の選択式にしたのは、子ども達の捉えをより正確に見取るためである。以前の実践の際に1～3で実施したところ、結果が中心に寄ってしまい、正確な分析を行うことができなかった反省を生かしてのことである。また、具体的に子ども達の考えを拾うために、Q1～Q7 まですべての項目に自由記述欄を設けた。今回は、本研究に特に関連性が高いと捉えた Q1, Q2, Q3, Q6 に限定してグラフ化している。その結果は以下の通りである(表3, 表4)。

(1) 英語科・社会科統合実践の結果

表3 英語科・社会科実践結果

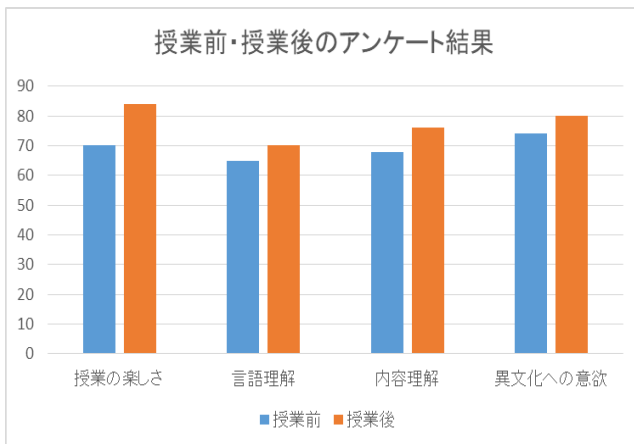


どの項目についても授業後の数値が上昇しており、あくまで本実践のみの結果ではあるが部分的 CLIL 型授業の効果が一定程度見られたと考えている。ここでは掲載していないが、実践前に見られた英語に対する否定的な回答も減少した。

特に大きく上昇しているのは、Q1 授業の楽しさと Q6 異文化理解への意欲である。この点に絞って子ども達の記述を見ていくと、山梨県のもを扱って学習したことで、新たな発見があったことを挙げるケースが多く見られた。身近にあるものを教材化し、形を変えながら繰り返し触れさせていく方法が効果的であったと考えられる。また、この結果は社会科の要素を入れることによって得られたと考えられ、部分的 CLIL のアプローチが活きた成果であると捉えている。次に多かったのが、英語だけではなく社会の勉強もできてお得だった、というものである。この反応は実践前に授業者としては想定していなかったものである。意欲とも理解とも解釈できるが、肯定的な意味合いで用いられていることは明らかである。決して少なくない人数がこのお得感に類する感想を持ったということは、部分的 CLIL によって得られる新たな価値と言えるだろう。

(2) 英語科・家庭科統合実践の結果

表 4 英語科・家庭科実践結果



こちらの実践においても、軒並み上昇が確認できた。Q1(楽しさ)は通常の外国語活動の経験しかない子ども達にとって、家庭科と英語を統合した授業が楽しさにつながったと思われる。次に Q2(言語理解)である。数値としては最も上昇の幅が小さかった。なるべく簡単な表現での指示を意識し、ジェスチャーや画像を用いながら授業を進めたが、1 時間あたりに扱う内容が多かったことで、このような結果になったものと思われる。児童の学習の様子を観察しながら、より積極的な母語の使用も必要だった部分である。Q3(内容理解)は、記述を見ると「～という表現を使えるようになった」「ゆで野菜サラダの作り方が分かった」等の意見が多く見られた。知識として理解するだけでなく、友達同士で使ってみる場面や、ALT や授業者とのやり取りの中で興味を喚起できたことが、内容理解につながったものと考えられる。これらの結果をまとめると、家庭科の内容を学習する中で、英語の学習を強く意識することなく自然とコミュニケーションの力を身に着けることができたと言える。参観教員のコメントの中からは教科を統合することによって、学習の動機付けの効果が指摘されている。英語がゲームのための記号でなく、意思疎通を行うためのツールとして意識できたこと。そして、さらに学びを

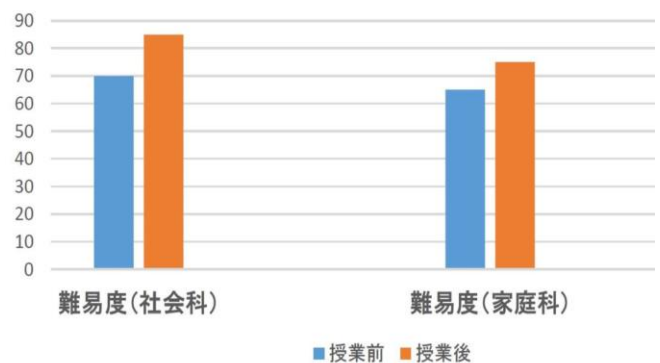
深めていこうとする意欲につながっている様子が見られたとのことである。これは、ALT と一緒に活動するという目的意識と相手意識を授業内に担保し、英語を使用する必然性を保証した結果であると考えられる。

(3) 明らかとなった課題

実践前後の比較から部分的 CLIL の手法の効果を感じる一方で、明らかとなった課題がある。それは難易度の上昇である。このアンケートでは Q4(難易度)の項目のみ、上昇はマイナスを意味する。つまり実践したことによって難しさを感じる子ども達が増加したということである。両実践共にこの難易度のみが上昇した(表 5 参照)。

表 5 難易度の変化

両実践の難易度の変化



問題はこの難易度の上昇をいかに捉えるかである。単調な外国語活動の授業に思考活動が生まれた結果と捉えれば、難易度の上昇は否定的な意味合いでなく、むしろ肯定的に捉えることもできるからである。そこで、両実践それぞれの難易度の上昇を感じた子ども達のアンケートから、自由記述欄の内容を抽出し、考察することで以下の点が明らかとなった。

一つ目は、語彙の難易度の上昇から難しさを感じているという点である。これは特に社会科との統合実践で多く見られた。筆者は当初、教科の内容を取り入れることで生まれる、

扱う語彙数の増加が原因ではないかと考えていたのだが、それに類する記述は一つもなかった。むしろ語彙数については、もっと知りたい、といった内容の方が多かった。では子ども達の感じた語彙の難易度とは何なのか、二つの例を紹介する。

ほかの言葉はすぐおぼえられたのに、どうしても鳥もつ(Giblets)がおぼえられなくてゲームで言えなかった。

あわび(Ear shell)はまだ本物を見たこともないしどういうものか知りたい。

ここで気づくのは Giblets も Ear shell も小学生にとって身近な存在ではないということである。他の単語と比べて、子ども達の思考の中で具体的なイメージが持ちづらかったのではないだろうか。しかし、記述からは学習意欲の後退につながるものはなく、むしろやり取りの中で言おうとしていたことが読み取れる。

二つ目は英語でのやり取りの流れについていく難しさである。こちらは家庭科との統合実践で多かった。こちらも二つの例を紹介する。

3番目にブロッコリーをきるって言いたかったけど、ニンジンとどっちが先かわからなくなっちゃって言えなかった。

〇〇先生(ALT)とお話ししながらつくれて楽しかったけど、教えてもらってばかりで教えてあげられなかった。

こちらの実践は、手順を押さえるために序数を入れているのが一つの特徴であった。上の記述から、子ども達はそれを使おうとしていたが、活動の中で手順を混同してしまい、結果として使えなかった様子が分かる。手順に関係した記述は、難易度の上昇を感じなかった子ども達の中にも見られた。また、下の

記述からは本当は言いたい、伝えたい思いがありながらも、活動の流れの中で伝えられなかった様子が分かる。これが難しさの上昇につながったようである。

社会科、家庭科の両実践の記述から共通しているのは、結果として難易度の上昇を感じてはいるものの、伝えたい・使いたいという思いがあり、そこに思考活動が認められる点である。この結果から、教材作成や手順の説明、指示などには細心の注意を払う必要があるものの、部分的 CLIL は思考活動を促すのに効果的な手法であると筆者は考える。

5. 部分的 CLIL 授業の 2 つの形式

二本の実践を通して、部分的 CLIL の授業には以下の二つの形式が考えられるというのが筆者の考えである(図 3)。

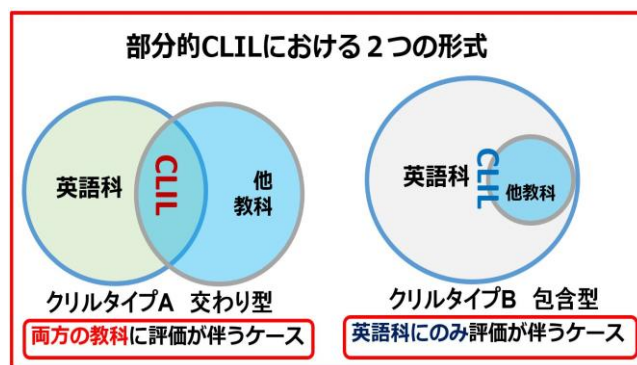


図 3 CLIL 授業 2 つの形式 筆者作成

部分的 CLIL 型の実践を小学校現場で行うにあたり、直面する大きな問題の 1 つが授業の評価をいかに行うかであろう。今回の社会科実践と家庭科実践とで明確に異なるのが評価の扱いについてであった。家庭科実践は年間指導計画上に示されている家庭科の単元「ゆで野菜サラダを作ろう」と英語科（外国語活動）の統合であるため、両教科の評価が必要になった。仮にこのようなケースをクリルタイプ A 交わり型と呼ぶこととする。一方で社会科との統合は、あくまで英語科の授業の中に要素として社会科の内容を取り入れたものであったため、評価は英語科のみでよか

った。こちらのケースはクリルタイプ B 包含型と呼ぶこととする。同じ部分的 CLIL の授業でも、単元構想時の難易度は圧倒的にタイプ A 交わり型が高くなる。限られた授業時間の中で両教科の評価を如何に行うか。そのためには一時間ごとの目標と評価を明確にする必要がある。加えて、タイプ B 包含型よりも統合する教科の比率を抑える工夫も必要だろう。その意味で部分的 CLIL の授業を組む際には、A・B どちらの形式に該当するのかを明らかにし、その上で内容について深めていく視点が必要である。

6. 成果

初等英語教育において部分的 CLIL の有効性を検証した本研究の成果として、次の 3 点を挙げる。

- ①他教科との統合(部分的 CLIL)により学習意欲の向上が確認できる。
- ②語彙のインプット量を増やすことが可能である。
- ③小学校の全科教員のメリットを生かした場面設定が可能である。

アンケートの結果から明らかとなったように、部分的 CLIL 型の授業により、学習意欲を向上させることが可能であると考えられる。しかし、これはあくまで 2 本の部分的 CLIL 型実践の結果であり、今後他教科との統合をさらに模索し続けていくことが重要である。

語彙のインプット量についても同様である。語彙数よりも如何に子ども達にとって具体的なイメージを持ちやすいかが一つの基準になるだろう。特に小学校段階では大切にしていきたい。もちろんこれは全く新しい単語や知識との出会いを否定するものではなく、授業全体のバランスを考える際に意識する視点である。

筆者自身が小学校教諭として、小学校だからこそ可能な実践を目指して取り組んできた

本研究だが、全科教員だからこそその強みは間違いなくあると言える。これまでの他教科の学習内容を把握していることに加えて、学びを深めるための場面設定や、教科と言語の内容を「どの程度」「どの場面で」「どのような方法で」取り入れていくのか考えられることが大きい。タイプ A(交わり型)とタイプ B(包含型)のいずれに該当するか明らかにし、評価と時数の問題を意識することさえ押さえれば、今後様々なバリエーションの実践が行えるだろう。

7. おわりに

授業者として実践を行い、部分的 CLIL の有効性について確実な手ごたえを感じている。教職大学院での研究はここで終わるが、個人研究として継続し、他教科に実践を広げていくつもりである。そして初等英語教育の新たな可能性を開拓していくことを今後の課題としたい。

2020 年の正式な教科化を控え、本研究での実践が今後の英語教育における一つの方法論となれば幸いである。

8. 引用文献

- ・文部科学省(2008)『小学校学習指導要領：第 4 章外国語活動』
- ・文部科学省(2017)『次期小学校学習指導要領：第 10 節 外国語』
- ・池田真(2011)『CLIL 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第 1 巻 原理と方法』上智大学出版
- ・池田真(2013)『CLIL の原理と指導法』英語教育 6 月号、大修館書店
- ・和泉伸一 他(2012)『第二言語習得からみた CLIL の指導原理と実践』、上智大学出版
- ・藤田(2017) 吉田研作 他(2017)『小学校英語科への対応と実践プラン』教育開発研究所
- ・山野有紀(2013)『小学校外国語活動における内容言語統合型学習 (CLIL) の実践と可能性』
- ・二五義博(2015)『小学校高学年における英語科授業の実践報告』
- ・太田圭、長瀬慶来(2017)『Partial CLIL と小学校外国語活動－小学校 5 年生の家庭科実践の分析から－』
- ・太田圭、長瀬慶来(2018)『Partial CLIL と小学校外国語活動－CLIL による“ある種の反転授業”へのチャレンジ』大阪成蹊大学教育学部紀要
- ・太田圭 (2017)『初等英語教育における部分的 CLIL を取り入れた授業実践－社会科との統合実践を通して－』山梨大学教職大学院実践研究報告書